

校歌の歌いかた、歌われかた

先輩の聴いた、川中時代のSP。

青柳 安彦

会報五十六号の貴重なスペースに、校歌に関する拙文を見開きで紹介して頂いた。光栄、且つ汗顔の至りだ。その後また、貴重な音源に出会ったので、懲りずに続編として書かせて頂こうと思う。

その前にあの文章は同期生の文集のために書かれた、大変冗長な文章なので簡単に復習しておこう。①現在の校歌の歌い方は「公式譜面」に忠実な歌い方で、校歌制定時のいわゆる「中央お仕着せ型」に近いものと思われる。

②それに対し、私達が在校した頃の歌い方は口伝えによって歌い崩された、言わば川越節である。③両者の最大の違いは「教えの庭」のビョンコ部分前後の間の取り方(小節数)とその部分のアクセントの取り方にある。

ということ、そのどちらが良いということではなく、僅か数十年の違いで現役生徒とOBが同じ校歌を合唱できないことについての感慨を述べたつもりだった。

そして川中、川高の歴史の最も古い生証人は「楠の木」と「校歌」ではないかということ。また、随分昔に作られた校歌であるにも関わらず、現代の感覚でも充分通用することから、誇らしい校歌であること、今後も大切にしていこうというのが主旨だった。各方面のOBの方々からも関心を寄せて頂き、大変嬉しかった。

ところで、あの拙文が会報に載った時には、すでに百周年記念C

Dができていた。当然ながら、その歌い方は現在の歌い方で、演奏録音ともに申し分なく、素晴らしいCDだった。とくにオーケストラによる演奏は、フィナーレになぜかドヴォルザークの「新世界」が聞こえて来るのが気になる。言えれば気にはなるが「たかが田舎?の高校の校歌」がアレンジ次第ではここまで素晴らしい響くものかと目を見張る思いで、三期の同窓生たちも、自分たちの歌い方と違うことも忘れて絶賛していた。

中には釣られて一緒に歌い出し、例の個所に来て「オイケボリ」を食って、初めての違いに気が付いたという者もいたようだが、ともかくこのCDは、一応公式譜面に則ったものであり、アレンジと演奏の素晴らしさと相まって、校歌の歌い方にひとつのスタンダードを与えてくれたことにはなる。

ただ、私達から言えば、せっかくなの百周年に、私達の歌い方が完全に無視され、抹殺されてしまったことを大変残念に思うわけだ。私達の前後には、この歌い方で歌っておられる先輩方が、かなり多世代に渡って存在しておられるだけに余計そう思う。

百周年の式典には、せっかく大勢の世代の方が見えていたのだから、古い歌い方を録音する絶好のチャンスだったし、うまく行けばいつ頃から変わったかのアンケート調査もできたと思う。百周年を飾る有意義な日玉にもなり得たも

のだけに、痛恨の思いが残った。ところがその後、古い歌い方が必ずしも戦前の川中時代からあったものではないかも知れないと言う問題物件が出て来た。学校の資料室の棚に古いSPレコードがあるのを発見したのだ。こんなところにこんな貴重な資料があるのに今まで誰もそのことに気が付かなかったのは不思議な気がする。このSPは黒ラベルのポリドール。○時盤で、陸軍戸山学校軍楽隊及合唱団、指揮楽長辻順治とあり、当時としては第一級の演奏であることが分かる。

さらに良く見ると「大毎主催全国選抜中等学校野球大会出場記念」とあって、それは昭和六年のセンバツ出場の時のものと考えることができる。

このレコードは恐らく全出場校に声がかかり、関係者やOBを目当てに商品化されたものだろう。もし甲子園で勝てば、その度にこのレコードを鳴らして校旗を掲揚するつもりだったのかも知れない。不幸なことに当時は出場選手

の年齢制限がなく、現役年齢のままの若い川中は緒戦大敗してしまった。当時のマスコミは若い川中の健闘を称え「君達は負けてはいない」と声援の記事を書いたというが、結局このレコードは甲子園では鳴らなかつたわけだ。

学校には蓄音器がないので、市内の阿部君宅で聞かせてもらった。そのSPの歌い方だが、一番を聞いた限りでは、基本的には今の歌い方と同じなのだ。つまり、現在の公式楽譜と同じ譜面、ないしは歌い方が、昭和六年には存在していたということになる。私達の

歌い方は昭和六年以後に発生し、私達の卒業以後に原形に訂正されたということもあり得るわけだ。今の「譜面忠実型」に戻したの

は多分、譜面の読めた牧野先生かあるいは合唱部が活躍するようになって、校歌を譜面で歌う機会が多くなり、自然に譜面に回帰していったものだろう。それがいつ頃のことだったかは、数世代のOBに歌ってもらえば分かることだった。同じ学校の、各世代代表による「校歌の歌い比べ」となったら、それこそ全国的な話題にもなっただろう。百周年が痛恨の逸話だったというのはその理由もある。

ところでSPの歌い方が「一番を聞いた限りでは」と言ったのは二番、三番の中間部の、いわゆる「ビョンコ」の、歌詞と音符の配分が違うのだ。現在の校歌とSPがどう違うか簡単に書いてみよう。

【歌詞】
盤が反っていて聞き取りづらいが、「礎据えし」が「礎据えて」と聞こえる。
②「切徳の友誼」が何か別のこと

を言っているようにも聞こえる。しかし歌詞は大して問題ない。「据えて」も手書きの「し」が見えることは間々あることだ。

【歌い方】
①「教えの庭」のビョンコと「秩父」の入り方は公式譜面の形。但し「秩父」の最初の「ち」は少し高く、シ、ドと歌っている。(譜面やCDはソ、ド)これも音楽的には大して問題ではない。現役及び我々の歌い方ではビョンコ部分で一番の「教えの庭」と、二番の「華美に走らず」は歌詞と音符の配分のしかたが違

うが、SPでは一三番まで同じ形で通している。
「カービツニ、ハツシラーズ」
「ヤーマット、ゴッコローニ」
と歌っているのだが、SPでは、「カッピニツハ、ツイラーズ」
「ヤツマトツゴ、ゴッコローニ」と歌っているのだ。これは現在の歌い方の一番の

「オツシエツノ、ニツワノ」
と同じ乗せ方である。私はここが気になるのだ。恐らく学校がレコード会社に渡した譜面が、メロディは今の譜面と同じものだったが、歌詞の二、三番は別紙で、タテ書きのものを渡したのだろう。そこで、実際の歌を聴いたことのない軍楽隊が譜面の通りに演奏し、ビョンコの部分も一番の「オツシエツノ」の乗せ方を、そのまま二番と三番へ踏襲したのだと思う。如何にもプロらしい解釈だとは言える。

しかしこのことによって「教えの庭」の入り方も、学校が渡した譜面には忠実であったが、実際に歌われていた歌い方とは違っていたのかも知れないという推測を許してしまうのだ。楽譜は今の形のもののまま演奏すると、当時の生徒がいつも歌っている自分たちの歌い方と違ってしまう。カッピニツハツイラーズ」もピンと来ない。ということもあつたのではないか?

このSPはある古物商が、結構良い値段で持ち込んだものだと言っていた。中古のSPの値段としてはたしかにサラサラーテ自身が弾いた「ツイギイネルワイゼン」に匹敵する良い値段ではあつたようだが、とにかく、そのタツタ一枚のSPのおかげで、私たちはもう一度校

歌と音符の配分のしかたが違